

# 『私の中の迷子の私』

川瀬 七貴

9959文字

あらすじ

子供の頃から何をやっても駄目な私。結局大人になっても駄目なままだった。そんな私を癒してくれるは、あるマッサージ店だ。施術を行う女性は、美人で優しく私の憧れだった。ある日、仕事で追いつめられた私は欠勤し、ついに会社を辞めてしまう。そんな私に彼女が話してくれた衝撃の内容は・・・。

「東<sup>あづま</sup>さん、では、ゆっくり体を起こして下さい」

声に促され、すっかり自分が寝入っていた事にやっと気付く。とろんと重い瞼とは反対に、体は魔法にかかったかの様に軽かった。

「あ・・・済みません、また寝てしまって」

「お疲れ様です。ベッドの右側に腰掛けて下さい。仕上げのストレッチをして終わりますね」

のたりと体を起こし、ぼてっとした足をベッドの横に垂らす。ほのかに香るジャスミンと、緩やかな音楽。部屋の灯りは暖かなオレンジ色の間接照明だけで、この状況下では、私でなくても熟睡してしまうだろう。

「では、背中を伸ばしますね」

「うううう」

しかも、彼女のゴッドハンドにかかれれば、心身ともに極上のリラックス効果を得る事が出来る。

(はぁ・・・幸せ)

「はい、お疲れ様でした。お着替えが済みましたら外のソファへお掛け下さい」

ずっと背後から気配消える。まだぼんやりしている頭でそちらを向いた頃には、オーガンジーを何重にも重ねた仕切りカーテンから、彼女が出て行った後だった。

「ふわぁ〜」

大きなあくびを一つし、店が用意してくれていたルームウェアから会社の制服へと着替える。この鉛色をしたタイトスカートとベストを切る度に、嫌でもため息が溢れてしまう。

(明日も仕事かぁ、嫌だな。ああ、面倒くさいから晩ご飯はコンビニで買って帰ろうかな)

せっかく体を軽くしてもらったにも関わらず、怠け心は消えないまま私も部屋を出る。

ウェイトニングスペースは高級アジアンテイスト調になっており、艶めくフローリングの上には籐で出来たソファと大振りな葉を持つ南国の観葉植物が置かれていた。

「今日もデトックスティーで良いですか？」

奥から長い髪をぴっちり一つに束ねた、美しい女性が顔を覗かせる。先程まで施術をしてきていた彼女だ。

「あ、済みません、お願いします」

満面の笑みで一つ頷いた後、また彼女は奥の部屋へと戻って行った。

(すごいな。技術を持っていて、綺麗でスタイルも良くて、おまけに良い人だし・・・私とは大違いだ)

卑屈さを抱えつつも、ほぐれきった体をソファへ沈める。

(こんな風に何でも持っているから、あれだけ良い人でいられるのかな。私も何か出来る事があつたら、あんな風に輝けるのかなあ)

今朝もまた会社の先輩に嫌みを言われた。いや、今朝どころか入社してから3年経つが、嫌みを言われなかった日が思い出せない。

(向いてないのかな、今の仕事。そもそも、私に向いている仕事って何だろう・・・)

「お待たせしました」

「えっあっはい」

ガラステーブルにそっと置かれたのは、藍色の花模様が美しいティーカップだった。中に入っている薄ピンク色のお茶からは、甘酸っぱい果実の香りがふわりと漂っていた。

「うわあ、いい香り」

「東さん、疲れが溜まっているみたいなので、リラックス作用があるお茶にしました」

もともとたれ目がちな愛らしい瞳を更にさげ微笑えまれると、連れられて私まで笑顔になってしまった。

「あ、えっと、最近仕事が忙しくて・・・」

仕事という言葉をした瞬間、今朝の先輩の言葉が頭を過る。

「あんた、私が頼んでいた仕事、まだ出来ていないの?! ちょっといい加減にしてよ」

嫌な言葉、嫌な声、嫌な表情。思わず眉間に皺が寄る。

「お忙しそうですね。胃腸も弱っていらっしゃる感じがしましたし」

心配そうに見つめてくる彼女に気付き、慌てて表情を戻す。

「大した仕事はしていないんですけどね。あ、それより済みません、いつも遅い時間に来ちゃって」  
ここは9時で閉店なのだが、仕事が終わる時間が遅いので、いつも閉店ギリギリの20時30分に滑り込んでマッサージを受けていた。

(かと言って、休みの日にわざわざこっちに来るのは・・・面倒だもん。やっぱり仕事の帰り道に寄れるのが楽だしな)

「いえ、うちは大丈夫ですよ」

客相手だからそうとしか言いようが無いだろうが、何故か彼女が言うと嫌みなく本当に大丈夫な気にさせてくれた。

「なら良かった。なんだか、ここに来ると、体も楽になるし、その、精神的にも癒されるんです」

お茶を啜りながら、その美しい立ち姿に思わず見惚れてしまう。

「そんな風に言って貰えると嬉しいです。いつも、どうやったらその人の疲れが取れるんだろうとは考えていますけどね。疲れって精神的だったり、肉体的だったり、自発的だったり、色んな所から貰ってきちゃいますから。疲れを取るって実は凄く奥が深いんですよ」

「自発的?」

「はい。私もよくやってしまう事なんですけど、自分で自分を追いつめちゃうというか。後になってみたら、そんなに大した失敗じゃないのに、もうこの世の終わりくらいに落ち込んでしまったり」

「柿谷さんでも落ち込む事があるんです?」

すっかり空になったティーカップを置き、驚きの声をあげる。

「私だって人間ですもん。落ち込みますよ」

「あ、いや、だって、技術も持っていて、美人だし、こんなお洒落なお店のオーナーだし。そんな凄い人でも落ち込むんだって」

ぐるりと店内を見回した後、もう一度彼女の顔を見る。

「一人で勝手にやっているだけですから。でも、せっかく来て下さった方が、良かったと思って貰え

るにはどうしたら良いんだろう、とかは日々考えています。もし私の独り善がりだったら・・・とか悩む事もあるんですよ。なので、そう言って下さると、本当に嬉しいです」

大袈裟に喜んでみせる訳でもなく、ゆったりとした口調で飾り気無く喋る彼女。そういう商売っ気を感じさせない所が、彼女の良い所だ。

「いや、実際心身共に癒されていますから。はっきり言って私、趣味も特にないし、特技もないし、彼氏も居ないです。このお店に来る事と、愛猫が、仕事を頑張れる起爆剤ですかね」

はははと頭を掻いて、自分の虚しさを笑ってごまかしてみる。

「東さん猫飼っていらっしゃるんですか？何猫です？」

「雑種ですよ、ただの。しかもすごいデブでね。とにかく、食い意地が私にそっくりで凄くて。戸棚に隠してあるおやつを勝手に開けて食べちゃうんですよ。まったく困った奴ですよ」

そう言いつつ愛猫の話をしているのが楽しくて仕方なかった。話し出すと、止まらなくて、ついつい下らない事まで語ってしまい、ふと視界に入った掛け時計が指す時間を見てギョツとする。

「あっ、もう21時40分じゃないですか。ごめんなさい！急いで帰りますね、本当にごめんなさい」

鞆の紐が片方しか通っていないまま、慌てて立ち上がる。

「そんな慌てなくても大丈夫ですよ。それにしても、凄く可愛がっていらっしゃるんですね、猫ちゃんのこと。今日は東さんの良い笑顔を見る事が出来て良かったです。ありがとうございます」

「あ・・・はい」

(私の笑顔を見て良かったなんて言ってもらえたの、人生で初めてかも)

「ごめん、聞くけどさ、あんた何だったら出来るのよ」

職場内がシンと静まり返る。目の前に立たせた私を睨みつけ、先輩は椅子に座ったまま腕組みをしていた。

「あの、でも、これ、まだ私教えて貰ってなくて・・・」

バンと机を叩く音が鼓膜に突き刺さり、思わずぎゅっと目を閉じる。

「いい加減にしてよ！あんた何年この会社にいるのよ！教えなくてもこれくらい出来て当たり前でしょ！新入社員の佐々木さん、何にも教えなくても一日でやってきたわよ」

ぷっと笑い声が後ろから吹き出る。振り向くと、営業の猪口くんが口を押さえており、その目の前で佐々木さんがしいーっと人差し指を唇の前で立てていた。私と目が合うと、さっと二人は何事も無かったかの様にパソコンに視線を移す。

(二人とも、馬鹿にしているんだ、私のこと)

「ねえねえ、御願だから私の仕事増やさないでくれる？これって逆パワハラって言うんじゃない？あんたの所為で私、過労死したらどーしてくれんのよ！！あんたなんか教えている時間なんて無いわよ！なんであんたみたいな奴が入社出来たのよ！信じられないわ！」

その後、先輩が何と言ったのか、何分間説教が続いたのか全く憶えていない。気がつくとは社内トイレで一人うずくまっていた。

(もう無理だ。この会社にいるのはもう無理だ)

涙が止まらない。喉の奥から酸っぱいものも込み上げて来る。

「どうしてあんたは何にも出来ないのよ」

ふと、母親の声が記憶の奥底から這い出てきた。

(ああ、また……)

「私はこんなに器用なのに、どうしてあんたみたいな子が産まれてきたんだろうね」

幼い私が震えた手で握っているのは、まだその体には大き過ぎる家庭用掃除機だった。仁王立ちする母と私の間には割れた花瓶が転がっていた。

「これ、私が気に入っているの知っていて、わざと割ったでしょ！」

ガクガクと膝を揺らしながら、大きく首を横に振る。

「新しいの、買ってくるから。ごめんなさい、お母さんごめんなさい」

「買ってくるって金はどうするの？小学生のあんたが！」

「お、お年玉。おばあちゃんがくれた……」

言葉を最後まで待たずして、母の手のひらが私の頬を強く打ち付けた。その反動で大きく尻餅をつく。

「あんた！お年玉を使うつもり？！あれはね、あんたに渡したけど、うちの家にくれた金よ！あんたの好き勝手に使って良いものじゃないわよ！！この泥棒！」

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「何も出来ない癖に家のものを欲しがらんじゃないわよ！あんたなんて何にも出来ない癖に！！」

うずくまる私めがけて掃除機の柄が振り下ろされる。

(あの頃、大人になったらお母さんやみんなみたいに何か出来る人になれると思っていた。なのに、結局私は……)

堪えきれず、口の中いっぱいになったものを便器へ吐き出す。

(みんなみたいになりたいのに。どうして私はいつまで経っても何にも出来ないんだろう)

「でもビックリですよ～」

話し声と共に誰かが入ってくる気配を感じ、ぐっと口元を押さえる。

「本当、東さんって図太いですよね。私、羨ましいです、あの図太さ」

(この声、佐々木さん……)

「あいつ脳みそ空っぽなんだって。馬鹿な上に、鈍感だから3年間怒られ続けても平気で出勤出来るんだって」

佐々木さんと先輩の声に反応して、体が小刻みに震え出す。

「私だったら、絶対辞めるけどな。あれだけ怒られたら」

「亜希乃ちゃんは怒られる事なんて無いから大丈夫よ。てゆーかさ、あんな出来ないやつ、この会社始まって以来よ」

「でしょうねー」

二人の笑い声が高らかに響き渡る。

「そう言えば、先輩、知っています？ 東さんって彼氏できた事がないんですって」

「げ、って事は25にもなって処女？！」

「そりゃそうですよ」

「まあ、あんな女相手にする男はいないか」

「だって猪口くん、金積まれても東さんは嫌って言っていましたよ。東さんとやるくらいなら死んだ方がマシだって」

「マジ？うけるー猪口やるなー。いいな、今度あいつも私の飲み会に誘ってやろうかな」

「え～じゃあ3人で行きましょうよ。私、美味しい鉄板焼きのお店、見つけちゃったんですよ」

また二人の間に大きな笑い声が沸き上がった。

(・・・わたし・・・みんなみたい……………に・・・なれなかった)

『みんな』って誰？私になりたい『みんな』って・・・？

それから一週間、私は会社を休んでいた。ちょうど有給が残っていたので、それを消化させて貰う事にしたのだ。だが、休みの最終日、先輩から連絡きた。明日出勤するか、という確認の電話だ。最初、突然休んだりして怒っているのだと思い、「明日は必ず出勤します」と答えた。にも関わらず、相手の反応はいまいちだった。そこでやっとお馬鹿な私は理解した。相手は「辞めます」と言って欲しかったのだ。

電話を切った後、しばらく放心状態で床に座り込んでいると、愛猫がいつにも増して甘えた声を出し、おでこを腕にこすりつけてきた。

「ラテ・・・心配してくれているの？」

みやおと鳴き声をあげ、上目遣いでこちらを見る。

「そっか、あんたは良い子だね」

そっと頭を撫でるとゴロゴロと喉を鳴らし、膝に座ってきた。

「お母さん仕事辞めようと思っているんだけど」

聞いた所で返事が返ってくる筈も無く、すっかり落ち着いた様子で、体を丸めて眠る体勢をとっていた。

「はあ、なんだか……もう疲れちゃったな……ねえ、お母さんもう駄目かも。……ごめんねラテ……お母さん死んじゃったら、お前は姉夫婦の所にいきな。あそこならきっと可愛がってもらえるからさ」

すると、眠ろうとしていた筈の愛猫が急にギッと爪を出し私の太もみにしがみ付いてきた。

「いたたた、痛い！やめてよ」

足をばたつかせても、爪を引っ込めない。普段、こんな事を決してする子ではないのに、一体どうしたものか。

(もしかして、今の台詞に怒っているの？！)

「ごめん、ごめん、冗談だよ。あんたを置いて行ったりしないよ。これからも一緒に居ようね」

言葉の意味が分かっているのか、一度大きく目を開け私の顔を確認すると、爪を引っ込め、また喉を鳴らし始めた。

(そうよね、人一倍敏感な子だもんね。言葉は分からなくても、きっと空気で察してくれたんだ)

「ありがとね。お前は本当に良い子だね。あのさ、会社は辞めるけど、お母さんあんたの為にまた働くから。それまでおやつ減らされても我慢出来る？」

返事はもちろん無いが、きっとこの子は許してくれる。そんな気がした。

「こんばんは」

そっと木製の扉を開けると、いつも通り笑顔の彼女が出迎えてくれた。

「東さん、こんばんは。お久しぶりですね」

彼女の声を久しぶりに聞いて、思わずほっとため息が出る。まだ10月なので外が寒かった訳ではないが、なぜかこのお店に入ると暖かさに包まれる感覚を覚えた。

「ちょっと、色々あって。なかなか来れなくて、あの、済みません」

「とんでも無いです。きっとお疲れが溜まっていらっしゃるだろうから、今日は特別にスペシャルコースでさせていただきますね」

どうしてこんなにも私が嬉しくなる言葉を言ってくれるのだろう。思わず顔が緩んでしまう。

「わあ、楽しみ」

「ふふ、では、こちらにどうぞ」

頷きながら自然と私も笑顔になっていた。思い起こせば、前回ここへ来て以来、私は一度も笑っていなかった気がする。

「では、お着替えがお済みになりましたらお声掛け下さい」

彼女が部屋から出て行くと、シャツを脱ぎハンガーに掛ける。ハンガーラックの横には姿見があり、ふと鏡に映る自分の姿が視界に入った。

「ひっ」

そこには、肋骨がくっきりと浮かび上がった血色の悪い女が映っていた。肌も髪もすっかり艶を失っており、とても20代には見えない姿だった。

「なに・・・これ」

涙が零れ落ちそうになるのを必死で堪え、急いでベッドの上に置かれたルームウェアに着替える。

(いつの間にこんな風になっていたの？気持ち悪い！！)

思い返せば、辞表を出して以来、スーパーに寄っても愛猫のものを買うだけで自分の食事を買っていない事に気付いた。

(昨日、なに食べたっけ・・・いや、昨日は何にも食べていないや。シリアルを少し食べた記憶があるけど、あれ・・・そうだ、あれは一昨日だ)

ペタンとベッドに腰を掛ける。

(そういえば、ラテのブラッシングも最近してあげてないや。こんなのじゃ駄目だ・・・もっとしっかりしなきゃ。あの子と頑張るって約束したのに)

「東さん、では、ゆっくり体を起こして下さい」

「ふえ」

間抜けな声と共に貼り付いた瞼を何とかこじ開ける。

(あ、また眠っていたや)

「お疲れ様でした。では、最後にストレッチをさせていただきますね」

「あ、はい」

のたりと体を起こし、彼女に背を向け座る。

「済みません、私、いびきかいていませんでしたか」

気まずそうに聞くと、彼女はいつもの愛らしい笑顔を見せてくれた。

「かいていませんでしたよ。ただ、私としてはいびきをかくくらい眠って頂けると、やった！って感じですけどね」

「はは、なら良かった」

「はい、では背中を伸ばしますよ～」

両腕を後ろから引っ張られ、気持ちの良さに思わずうなり声が漏れる。

「東さん、かなり疲れていらっしやいましたね」

「はあ、まあ・・・」

会社を辞めたとはさすがに言い辛く、返事をにごして誤摩化してみた。

「そう言えば、今日この後すこしお時間ありますか？」

「え？はい」

「私パン作りに最近凝っていて。東さん、パンがお好きだって前におっしゃっていたから。もし良かったら召し上がって頂いて評価をもらえたらな、なんて」



「も、もちろん。というか、寧ろ良いんですか」

「こちらこそ、もちろん、ですよ」

組んだ両手で肩を叩くと、高い音が響き渡り施術の終わりを知らせる。

「はい、お疲れ様でした。では、紅茶とパン、用意しておきますね」

彼女が部屋から出て行くのを見届けると、うんと一度伸びをし、服を脱いだ。

(体を触ったから、きっと激やせしているの、バレたよね)

しかし、敢えてその事には触れず、気を遣ってくれた彼女の優しさに、心の棘が落とされていく。

(私もああいう気遣いが出来たらな。先輩や佐々木さんに嫌われずに、いや、今まで出会った人達  
に、母さんに、嫌われずに済んでいたのかな)

「お疲れ様でした、どうぞこちらにお掛け下さい」

部屋から出ると、パンの香ばしい香りと、オレンジペコの爽やかな香りが出迎えてくれた。

「はあ、美味しそう」

ソファーに座り、さっそく用意されていたおしぼりで手を拭く。

「塩パンに最近ハマっています。お口に合えば良いのですが」

「いただきます」

ロールパンを少しスリムにしたフォルムのパンは、表面はパリッとしているが、中はおもちりとした弾力があり、見た目よりもかなり食べ応えがあった。

「うわ、美味しい。そこら辺のパン屋さんより美味しいですよ、これ」

「良かった」

嬉しそうに笑いながら、彼女も正面の丸椅子に腰掛ける。

「すごいな、マッサージも上手いのに、こんなに美味しいパンが作れるなんて」

「とんでもない、東さんが褒め上手なんですよ」

「いやいや、本当に凄いなって。そんなに歳も違わないのに、私なんかと大違いで……柿谷さんが羨ましい」

思わず本音が口から零れ落ちてしまった。彼女も顔から少し困惑の色を滲ませる。

「あ……済みません」

「いいえ。でも、私、東さんに羨ましいなんて言って貰える人間じゃないですよ」

一度背筋を伸ばし姿勢を正すと、軽く咳払いをする。そして次の瞬間、あまりにも衝撃的な言葉を発してきた。

「私ね、子供の頃すごく太っていて。肥満児だったんです。20歳くらいまでは、あだ名がデラックスでしたから。ほら、あのタレントさんからきているんですけど」

返事が出来ず、まじまじの彼女の顔を見つめる。この華奢な体から、どうやってデラックスな体型を想像しろというのだ。

「体型の事でよく皆から、からかわれていました。いじめも受けましたよ。だから男性とお付き合い

なんてした事なくて。でもね、20歳の時に、好きな人が出来て。ただ、相手が悪くて・・・その人結婚詐欺だったんです。勿論、本気で相手になんかされず、残ったのは、深い心の傷と借金だけでした。それで、絶望感に打ち拉がれて自殺しようと思って樹海まで行ったんです。でも、木にロープを垂らしたら、凄く太っていたから木の幹が折れちゃったんです。馬鹿みたいな話ですよ」  
笑いながら柿谷さんは話すが、内容的には全く笑えない。だが、少なくとも今までの彼女より親近感を感じた。

(美人でスタイルも良くて、おまけに技術も持っていて。なんでも出来る人だと思っていたけど・・・)  
「お陰で死なずに済みましたが、落ちた衝撃で足をねん挫しちゃって。とにかく足が痛むから、整体に行ったんです。そうしたら、そこで出会った先生がとってもカッコいい方で。一目惚れしちゃったんです。本当、単純ですよ、私って。それから、少しでも先生に会う為にはどうしたら良いんだろうって考えて。整体に通うにはお金もかかるし、だったら自分も整体師を目指そうとスクールに通い出しました。動機こそ無粋でしたが、勉強しているうちに精神と肉体の深い繋がりにすっかり惹き付けられて。気付けば先生の事なんてすっかり忘れて夢中になっていました。それから、もともと太りやすい体質だったんですが、きちんと自分の体と心に向き合って、心身共にバランスを取れる生活を送っていたら、自然と痩せていったんです」

七部丈のシャツから伸びた細い腕には、よく見ると妊娠線らしきものが確認出来た。

(信じられないけど・・・本当に太っていたんだ)

「私ね、高校を出てから一人暮らしをしていたんですけど。それはもう酷いゴミ屋敷状態だったんです。今までは、全然平気だったのに、生活スタイルを変えたら部屋に物が溢れている事に、嫌悪感を感じてきて。だから、家の中にあるものをどんどん捨てていって。それから一度も磨いた事のない床もワックスでピカピカにしたんです。そうしたら、床に自分の姿が映ったんです。もうビックリして。この家、こんなに綺麗だったのに、台無しにしていたんだなあってその時初めて気付いたんです」

彼女の言葉にふと床に視線をやる。店の床もやはり美しく輝いており、うっすらと私の姿を映していた。

(うちの家の床・・・こんな風に光っていない。そういえば、ラテはよく床を見ていたけど、もしかして汚いなあって思っていたのかな)

「部屋が散らかって汚れている時って自分に迷っている時で。どこに何があるのか分からない様に、自分に何が出来るのか分からないとか、どうして良いのか分からないとか。汚れている部屋では自分を見つめ返せないんですよ。でも、部屋を片付けて床を磨き出したら、なんだか心の傷も消えて、霧が晴れる様な感覚になるんです」

「そっか・・・部屋が汚いのに綺麗な心は生まれてこないですよ」

「私の場合は、ですけどね」

しかし、私にもちゃんとそれは当てはまっていた。愛猫のブラッシングすら怠り、部屋も散らかり放題、フローリングに至ってはここ数年磨いてなんかいない。そして、メンタル状態はもちろん最悪だ。

「ブラッシングと掃除・・・しなきゃ」

こうはしていなれないとすくっと立ち上がる。しかし、せっかくやる気が出てきたにも関わらず、時計の針が指す先を見て、ガクッと力が抜けてしまった。

「しまった、こんな時間・・・掃除用の洗剤が・・・」

いつもの癖で閉店ギリギリにここに来てしまい、とっくに近所のスーパーは閉まっている時間になっていた。

「あ、東さん、良かったらこれ使ってください」

彼女が小走りでレジ裏にある扉から出してきたのは、床用ワックスだった。

「うちのお店でも、私の家でも使っているんですけど、これ、凄いですよ。ビックリするくらい綺麗になるんです」

「え、でも・・・」

「ストックがいっぱいあるので気にしないで下さい。それに、東さんがこれで晴れやかな気分になってくれたら、私すごく嬉しいです」

「・・・あの・・・どうして、そこまでしてくれるんですか？」

すると、彼女は一点の迷いもない澄んだ瞳でハッキリと答えた。

「東さんの事が好きだからですよ。うちには色んなお客様が来て下さいます。勿論皆さんに感謝の気持ちはあります。でも、東さんみたいに素直な心を持った方に私は憧れるし、そういう気持ちは忘れちゃいけないといつもお会いする度に思うんです」

「素直・・・？私が？」

「はい。今こうやって私の言葉に耳を傾けてくれている所とか。私が昔そうだったんですが、人がどんなに良い言葉、例えばヒントやアドバイスを言ってくれていても、あなたとは違う、と卑屈になって聞く耳を持たなかったんです。だから一向に自分を取り巻く環境も自分自身も良くならなかった。ああ、あの時素直に聞いていればな、と思う事は今となっては多いですね」

自分が懂れている人からそんな事を言われても全くピンとこない。ただ、これがお世辞でも、<sup>ついで</sup>追従だったとしても、そんな事はどうでも良い。今の疲れきった心には、こういう優しい言葉がどれほど必要だった事か。

「東さん、きっと今、何かに迷っていらっしゃるんですね。私も私の中で迷子になってしまっていた時期があるから分かります。でも、必ず道はあります。だって、歩けばそれが道なのですから。立ち止まらなければ良いだけなんです」

(自分の中で迷子・・・そういえば、私もみんなみたいになりたいとか・・・確かにあれって迷子になっていたんだよな)

「道は必ず、ある・・・か。まずは、家の掃除が一番ですね。恥ずかしいけど荒れ放題だから」

「それは掃除しがいがありますね。鏡みたいになった床を見たらきっと東さんも迷いが払拭されますよ」

「ありがとう」

店を出る時、もう一度彼女にお礼を言うと、家路を急いだ。迷子になっている私を連れ戻す為に。